



## W杯、体操(床)優勝 東京五輪代表候補 南一輝さん

生まれ育った下関で10年間続けてきた体操で、東京オリンピック代表入りを目指す20歳。今回は、「床運動のスペシャリスト」と呼ばれる仙台大学の南一輝さんをご紹介します。



始めた頃は、練習の後、発作が起きてそのまま病院に通うこともしかし、体操を続けたおかげで発作は治まりました。週3回だった練習は、間もなく週5〜6回に。友達と遊んでいる時間も、練習の日々。「ずっと練習が嫌いでした。でも、試合で結果を出せるとうれしくて、そのことを楽しみに続けてこれました」

自分を信じ続けること  
それが今につながる  
練習嫌いでした

恩師である宮原先生との出会いは、小学2年生の時。「先生との出会いは大きかったですね。強制せず、大好きなトランポリンを自由に跳ばせてくれました。自分の武器である空中感覚を身に付けられ、ここまでこれたと思います」

南さんの高校時代には週6回、練習の送迎もした宮原先生。「子どもの頃は、特別目立つ選手ではなかった。でも、中学生の時、中国大会で三連覇を果たし、頭角を現してきました」と話します。

高校進学時、特待生として県外からの誘いの話が続くもありましたが、地元下関での選手生活を選びました。「環境がどうであれ、結局、自分次第。それしかない。地方にいても、結果は残せます。自分を信じて、自分との闘いに負けないこと。それが大事ですね」

### 結局、自分との闘い

▶東京五輪予選  
種目別ワールド・  
カップ第5戦・国際  
男子床運動  
金メダル







# まちかどボイス

今月のテーマ  
令和2年、頑張ること



◀ 武器である空中感覚を生かした技



▶ 36年間、下関で体操を指導している宮原正裕さん。「高校卒業まで育てたい」と思い、初めて高校生を教えた選手

## 楽しむ気持ちが一番大事

転機は、下関国際高校3年生の時。中国大会で高校生活初めての優勝を勝ち取り、続くインターハイでも優勝。体操を続けてきて、一番うれしかったそうです。この二つの大会で、「伸びてきた」と実感し、練習嫌いではなくなりました。結果を出せた試合で気付いたことは、「ベストパフォーマンスには、メンタルを鍛えることが大切。そのためにはやっぱり練習が必須」。その頃から、演技直前に緊張しなくなりました。「周りを気にしたところで、パフォーマンスが上がるわけじゃない。結局、楽しむという気持ちが一番大事だと気付いたんです」

現在、体操競技ナショナル選手として各種国際大会に参加する、男子2020特別強化選手でもある南さん。東京オリンピックに向け、6種目ではなく得意な床運動に絞ったことについて「1種目でも輝ける。こういう生き方もあると思うんです」と笑顔で話してくれました。

日本から種目別枠でオリンピックに出られるのは、ただ一人。昨年11月、ドイツで開催されたワールドカップ第5戦・コトブス国際で優勝し、今月、オーストラリアで行われる第6戦に向け、練習に励んでいます。得意技は、「シライ2」と「リ・ジョンソン」。

下関出身の20歳。オリンピックへの道、ただ今、躍進中です！

## 編集後記

- 成人の日記念式典。いつの時代も晴れ着を身にまとった若者の姿には感動します。わが子が成人式を迎える日が待ち遠しいような寂しいような…。(わ)
- 市報の編集ではパソコンで作業することが多いです。とにかく肩が凝ります。隣を見ると、同僚も肩を回しています。肩凝りのようです。(き)
- 下関の地域資源を活用した素晴らしい商品がたくさんできています。この取り組みが広がると、もっと楽しい街になるかもと期待しています。(ひ)